



建学の精神

「真理はあなたたちを自由にする」
(ヨハネによる福音書 8章 32節)

自由学園の校名はこの聖書の言葉から取られています。自由学園は一方的に知識を覚えこませる詰め込み主義的な教育ではなく、実生活に根ざした学びの中で考える力を育み、実力ある人間を育てたいと願って創立されました。学校を一つの家庭、一つの社会と考え、協力して自治的に家族的に営む日々の生活の中から学ぶ「生活即教育」を理念としています。その基は「自分たちのことはできるだけ自分たちです」という「自労自治」の精神です。



上 女子部のマーク
下 男子部のマーク
男子部の TTF は「思想しつ 生活しつ 祈りつ」を短かく「思想 技術 信仰」とした英語「Thought Technique Faith」の頭文字です。

学校法人 自由学園

〒203-8521 東京都東久留米市学園町1-8-15

TEL : 042-422-3111 FAX : 042-422-1078



創立

創立者である羽仁もと子・吉一夫妻は、1903年(明治36)に月刊誌『婦人之友』の前身である『家庭之友』を創刊して、良い社会は良い家庭をつくることから始まると考え、家庭生活の合理化を提唱しました。やがて二人は長女 説子や三女 恵子(次女は夭折)が受けていた学校教育を飽きたらなく思い、自分たちの理想とする教育を行なう学校を始めたいと願うようになりました。二人の信仰の師である植村正久牧師に「私たちは新しい学校を始めようと思っています。その名前を自由学園とします」と話したところ、植村牧師は「それは良い名前だ」と言って二人を励まし、教師陣に娘の川戸環を紹介するなど協力を惜しみませんでした。

羽仁夫妻は1921年(大正10)三女 恵子が小学校を卒業するのを機に、当時の文部省令によらない「各種学校」として7年制の女学校を始めました。『婦人之友』1921年(大正10)2月号に「自由学園女学校」と題した記事を掲載し、もと子は「『自由学園』の創立—私共同志の新事業にご賛成を願います—」と呼びかけました。

羽仁夫妻による、「実力のつく役に立つ人間になる勉強」を「新しい家庭的友情的気分」のある学校で始めたいという考えに賛同した『婦人之友』の愛読者の家庭から、恵子を含む26人の少女が最初の生徒として入学しました。



創立者 羽仁吉一(1880~1955年)
もと子(1873~1957年)
学園開校間近いころの二人

創立の背景と歴史

羽仁もと子は青森県八戸出身で、16歳のとき祖父に連れられて上京し、東京府立第一高等女学校に入学。級友を通してキリスト教に触れて洗礼を受け、紆余曲折の後、当時の「東京五大新聞」の一つであった報知新聞社で日本初の女性記者として活躍を始めました。夫の吉一は山口県三田尻(現・防府市)出身で、もと子に遅れて入社しましたが、若くして編集長となります。やがて二人は結婚し、独立しました。1903年(明治36)に『婦人之友』の前身の『家庭之友』を刊行。のちに婦人之友社を設立しました。もと子の思想に賛同した『婦人之友』の愛読者たちによって、1930年(昭和5)には「友の会」が誕生しています。富士見町教会会員であり、植村正久牧師を信仰の師と仰ぐ羽仁夫妻は、深い信仰に基づいて「婦人之友」「自由学園」「友の会」という三つの事業を通して「神の国」実現のために生涯を捧げました。

1921年(大正10)自由学園の創立にあたり、校舎の設計を富士見町教会で同じく会員だった建築家の遠藤新に依頼します。遠藤は帝国ホテルの設計監督のために折から来日していた、アメリカの高名な建築家 フランク・ロイド・ライトを羽仁夫妻に紹介しました。ファミリースクールへの共感から、ライトは設計を快く承諾したといわれています。自由学園の拠点が東京・目白(西池袋)から郊外の久留米の南沢キャンパスに移ったのも、この建物は「明日館」として「卒業生の社会に働きかける活動の場」「社会に開かれた窓」として積極的に活用されてきました。1997年(平成9)に国の重要文化財に指定されています。創立3年目に起こった関東大震災のあと、婦人之友社や自由学園のある敷地も狭くなってくると考えた創立者は、1925年(大正14)に北多摩郡久留米村(現・東久留米市)に10万坪の土地を求め、3分の2以上を学園関係者や『婦人之友』の愛読者に分譲し、学園町を建設しました。1929年(昭和4)には羽仁夫妻の住宅や女子寮を建設し、1927年(昭和2)に目白に開校していた小学校(初等部)を1930年(昭和5)に、女子部を1934年(昭和9)に移転し、1935年(昭和10)には男子部を開学しました。また、幼稚園にあたる幼児生活団を1939年(昭和14)1月、目白に開設しました。新制大学が発足した1949年(昭和24)には大学に相当する最高学部(男子4年制、次年度から女子2年制も)を開学し、一貫教育の学園となります。独自の大学教育を行なう最高学部は学校教育法の「大学」ではなく、「各種学校」として始まり、今日に続いています。「資格」や「肩書き」のためではなく、生活に根ざした学問を通して真の人間教育を目指した創立者の教育理念が貫かれています。卒業生が大学卒として多くの企業や大学院に受け入れられているのは多くの卒業生が築いてきた実績の賜物といえるでしょう。第二次大戦中、自由学園は当局から何度も学園の名称から「自由」を外すようという要請を受けましたが、「自由」の名を守り通したのは、創立者の強い信仰と教育理念が貫かれた一つの証となっています。

羽仁もと子の著作は『羽仁もと子著作集』全21巻にまとめられ婦人之友社から刊行されています。羽仁吉一の著作は『雑司ヶ谷短信(上下)』、『我が愛する生活』、『自由人をつくる』などがあります。